

令和5年度長野県社会教育委員会議 議事概要

日 時 令和6年3月18日（月）15:00～16:30

場 所 オンライン会議（長野県長野合同庁舎 本館504会議室）

参加者 長野県社会教育委員（五十音順、敬称略）

- ・齋藤 新（NPO法人グリーンウッド自然教育体験センター専務理事兼事務局長）
- ・長井 裕之（長野市立徳間小学校 校長）
- ・長峰 夏樹（長野県社会福祉協議会 まちづくりボランティアセンター所長）
- ・羽田 吉彦（長野県社会教育委員連絡協議会 会長）
- ・細萱 育子（長野県長野ろう学校 校長）
- ・松澤 雅子（長野県PTA連合会 副会長）
- ・向井 健（松本大学総合経営学部 准教授）
- ・森田 舞（ゆめサポママ@ながの 共同代表）
- ・柳澤 礼子（佐久市中央公民館 館長）

文化財・生涯学習課

- ・岡田 憲輔（課長）
- ・赤池 誠治（生涯学習係長）
- ・関 博子（担当係長）
- ・篠原 靖昌（主任指導主事）
- ・油井 玲子（指導主事）
- ・小澤 多美子（総務係主査）

○開会

○教育次長あいさつ

○自己紹介

○事務局説明

○意見交換

①デジタルリテラシー向上に向けた取組について（資料別添）

【柳澤委員】

佐久市と佐久市公民館がタイアップして、高齢者向けの初心者スマホ講座を開催しています。スマホの使い方だけではなく、市のLINE支所アプリをダウンロードして、講座内容や情報を入手できるようにしています。また図書館のネット予約システムやデジとしょ信州も紹介して使えるような内容を講座に入れていきます。

実際に使うときに高齢の方に、「スマホで、ここです。」と言っても、「目が見えないわ。」と言って、スマホをかざして一生懸命探すというような姿。「ここをこうしてください。」と言っても、「手が震えてしまって押せないわ。」と言う姿が見られました。公民館では「腕を最初に机にしっかり固定して、それから触ってみてください。」というような高齢の方ならではの視点から話をするようにしています。お一

人お一人の丁寧なサポートが必要で、佐久大学の学生などをボランティアで入れるようにして、個々に寄り添って話をしてもらうような仕組みも作っています。それでも、公民館窓口までに来るのが難しい方や一人暮らしの方、家族にそういうサポートする人がいない方への対応をどのようにしたらよいのかは常に話題になるところです。

【羽田委員】

世代間のデジタルデバイドという言葉も、何となくわかりますが、ピンと来ていない。情報格差という捉え方で話をしたいと思います。我々の世代はデジタルデバイスがある、ないのギリギリのところかと、柳澤委員の話にあった対象の方たちよりは若くて、何とか流れについていこうとジタバタしているような世代かと思っています。

デジとしょ信州やQRコードを読んで試してみましたが、まだ登録ができていないです。ログインするためのページにどうやってもたどりつけませんでした。サインインというところのボタンを押したが、何か番号を求められたところで止まっています。

このような事例がこの2、3月にも二つほどありました。一つは確定申告。自分の分は今まで通り普通にe-Taxできたが、親戚の確定申告は私がお手伝いをしました。税務署に行って番号をもらって、はじめてみましたがいろいろな経費を入れないといけない。どうしてもページにたどりつかない。よくよく聞いてみたら、サイトの入口が違う。我々の世代にとっては、デジタルリテラシーを得るための入口のハードルをいかに下げてくださいか、そこが一番大きな課題です。

【細萱委員】

来年度、特別支援学校で図書館機能の充実事業が始まり、全ての学校が図書館のシステム化を図るとか、電子書籍を学校における図書活動に取り入れるなど有効な活用を促進し、障害に応じた幅広い図書へのアクセス方法を充実させるなど、様々な取り組みが期待されているところです。

実際、特別支援学校の図書館は、その充実が求められるところ。今、学校では1人1台端末が整備され、ICT教育がどんどん日常化されています。お子さんの中には、図書館に行きたくても行けないとか、病気の関係で訪問教育を受けているようなお子さんもいます。そういうお子さんが、W3というようなアバターロボットを使って地域の図書館に行った例があります。自分で操作しながら、本に触れる機会を持つという取り組みがなされています。今後、特別支援学校のICT活用の例として紹介される予定です。資料にある「デジとしょ信州を使ってみよう」は、聴覚障害者向けということではありますが、ろう学校のお子さんにとって言葉に触れるというのは非常に大きな意味があります。言葉をたくさん身に付けて正しく使えるようにするためには本は欠かせないもの。デジとしょ信州は、私自身もまだ勉強不足なので、教員も生徒たちにも広げ、もっと活用を日常化していかなければと今日改めて思いました。

【齋藤委員】

私も娘がおり、泰阜村のような小さな村だと、スマホを持つのはこの卒業式の後で、卒業式後にみんなとLINE交換するということがあります。昨日、ちょうど謝恩会で、子供たちは夢中になってお喋りもするけれど、みんな下を向いているみたい。今までなかったものが急に入ってくると、こういう様子になり、ある意味微笑ましい部分もある一方で、果たしてどの情報が正しいのかを子どもたちは理解しているかどうかわからない。

やはり子供たちの育ちの中で多様な人たちが関わるのが重要な一方で、子供たちが一体どんなものに触れているのかわからないという状況にどんどんなってくると思います。社会でのスマホなしの生活ではあ

りえない、だからこそ子供たちにそのスマホの使い方という以前に、情報をどのように得てくるのかとか、その情報が正しいのかどうかということも含めて検討していかないと厳しい社会になってくるとすごく感じているところでもあります。

また私たちは、山村留学をやっています。一昨年度昨年度にいきなり、タブレットを配りますということから始まって、もう生活が一変してしまう部分がありました。子供たちも話し合っただうやって使うかというのを考えましたが、この急激な変化というものに、誰もついていけない状況であるということをして社会自体が理解していないと、何となくみんな使えるから使えるよね。みたいな雰囲気になることの方が危ないと感じています。

【森田委員】

ゆめサボママ@ながのというママの団体をやっています。ゆめさぼママ@ながのでは、オンライン子育てサロンママの手繋ぐ信州が3年目を迎えました。長野や松本とか上田ではセミナーがあるが、とにかく長野県の外に出るのが大変だということお母さんのために、月・水・金の10時から11時の1時間、Zoomを繋いでオンラインサロンを開催しています。キッズヨガとかお小遣いとか、助産師会さんと連携して、いろんな活動を毎月毎月ずっとやっています。2Dのメタバース広場ということで、ここで朝活もやっています。朝5時半に集まって10分間、お母さんたちが今日、こんな日を過ごそうね。みたいな感じで、すっぴんでもパジャマでも人との交流ができるという場を提供しています。

私の中1と小3の子供たちに正しい知識を伝えることは、やはり親が使った良い面と悪い面をしっかりとわかるということがすごく大事だと思っています。年配の方たちの苦労もありますが、やはり私達世代ですら、Zoomを使うことがないとか、Facebookやインスタ、TikTokは怖いみたいな、そういうお母さんたちが多いが、子供たちはそこへ飛び込んでいるので、いかにお母さんたちに、こういったものを使っていたいで、良さを知ってもらって、怖さも知ってもらうことで、さらに良さを伝えていくことができたらいいなということで、こういう場を使っています。しかし、やはり使えない人は使えない。

先ほどの話で、どこを押したらいいんだろうは、30代・40代も同じだなと感じています。一番は私達が楽しんでる姿を伝えることが大事。どうしても怖い怖いが先行してしまい、良さを伝える前に怖い抵抗ができ、抵抗があって参加できない人たちも多いので、こんないいことがある。あんなことがあるので、ここだけは押さえようみたいなことをバランスよくやるのは、これは年代関係なくお年寄りもこれを使うとこんな便利になるんだとか、お母さんたちもこれを使うとこんな素敵な未来があるんだとか、子供たちにも教えられるようになるんだというのを見せていくことが私達の役割だと思って、このような活動をしています。ぜひ近くにお子さんたちがいる方がいれば、無料で参加できるのがあるらしいよと口コミしていただくと大変嬉しいです。

【向井委員】

一つ目として資料の中の従来の公民館という場所が30%で図書館が60%というあの表が面白い。興味深い。公民館は、ともすれば集まることを前提として、制度設計だとか授業ってということが組み立てられて、その場自体の意味があったと思います。

デジタルというのは一つの技術で、それを住民の人たちの生涯学習の充実や学びの質的な発展にどういうふうに繋げていくのかという視点がすごく重要。齋藤さんが言ったように、デジタルに使われるんじゃないかと、むしろそれを適切な形で読み解いて使いこなせる。そうした力量とか、むしろそうしたデジタルの関わりがリアルな世界にどういうふうに繋がるって人々の協働を促進させるのかという点も持ちながら、そのデジタルの活用のあり方を考えていく必要があるんじゃないかと思っています。

二つ目、いろいろな特別支援学校の先生が語ってくださった通り、このデジタルの普及によって今までこれなかった人たちがそれによって学び、アクセスできるようになった環境が広がったという面も多分いろいろあるのではないかなと思います。いろいろな人たちに対して幅広く誰もが学び、一緒にできるような生涯学習を構想していくということであるならば、今まで、学びにアクセスしなかった人たちに対してどううふうに、そうした学習環境を提供することにデジタルの部分が貢献しうのかという点はずっともっと探求していくことかと思えます。一方でそうした技術の発展というのは、もちろんプラスの面もマイナスの面もあるということだと思うので、情報自体の読み解く力、何が私達にとって正しい情報なのかって読み解く力が非常に求められていると思えます。どちらにしても、そのデジタルの活用によって学びが個別化しやすいという側面は否めないと思うので、そうしたPRIに何か物事に触れてこそわかる部分というものもあると思えます。そうしたリアルな出会いや人々の協働というのを促進する形でオンラインでの出会いが新たなリアルな出会いも相互連関というものを作り出していくことはもっと重要かと思えます。

最後に、これは善し悪しなんですが、今のデジタルの情報というのが、それにアクセスするとその人の関心に合わせてオーソライズされた情報になって、提供されると思うんです。これってすごく便利だなと思う反面、何か規制面でも良いとか予期せぬ情報の出会いって結構リアルな場面だったらあったような気がします。図書館に行って見ると、こんな本もあるんだと自分自身が知らなかった情報に、ふと偶然出会うというそういう出会いみたいなものも、何か意味があったのではないかということもあるので、そうした個人に特化した学びと、予期せぬ偶然的な出会い学びの出会いということも、これも技術の発展によって解釈されている部分もあるのかもしれませんが、何かそんな学びの機会も大事にしたいなと思えます。

学生を連れて地域の公民館のおじいちゃんおばあちゃんとスマホを教える講座を一緒にやるときに、おじいちゃんおばあちゃんたちは孫の写真が見たいというのがすごい大きな動機になって、何とかして携帯やスマホを使うんだと言っています。学生も一緒に座ってる姿が本当優しく、いろいろ地域の公民館の人たちと活動しています。

【長峰委員】

明日ちょうど佐久地域で民生委員の研修なんです。スマホを使った災害時の要援護者の安否確認のツールを紹介するというのが私のミッションで、県内にも何ヶ所かで取り組みを進めています。高齢者、あるいは障害を持った方々のためにです。それから特に医療的ケア児とか、重い障害の子とか、そういう子たちにスマホを使って安否確認を地域ごとにする仕組みが普及しているが、そういうのを進める方々に教えるのがとても大変。ぜひまた若い方々に社会教育の分野と連携しながら進めていきたいというのが一つあります。

もう一つは、その教えるところではなくて、お買い物難民の買い物問題とか、中山間地の足の問題とかも若い人たちにどんどん地域の課題に参加してもらいたい。

もっと私達も社会教育委員と連携しながら、学びを越えて地域を変えていくようなイノベーションを起こしてくるというようなそういう連携ができればいいなと日々思っています。

【長井委員】

本校ですが今年度の秋、インフルエンザで結構学級閉鎖等大変な状況がありました。そのときに欠席連絡を電話や連絡帳でやってきましたが、朝の時点で電話が鳴り止まないということを学校として経験してきました。それでこれを何とかしなければということで、ずっと前から保護者さんからも欠席連絡はスマホを使ってフォームやZoomでできないかのご意見はいただいていたんですが、デジタルデバインドが職員間で進まない状況があったが、いやもうこれはもうやるしかないなということで、先行してやってくださっている若い先生方のアイデアをお借りしてこれも全校でやろうということでそういう体制を整えました。学

校評価アンケートでも保護者からはずっとそういう意見をいただいていたので、実際にその活用が進む中で保護者から大変よかったという意見をいただきました。学校の職員は欠席連絡がスムーズにできるようになったということがあります。本当に保護者世代として30代40代の世代の方の中ではデジタル化について意識も高まっていることを痛感しました。数年前だと、なかなかそういうことをやるといっても、スマホ持っていない方がいるとか、利用しない方に対してはどういうふうにしなないといけないとか、なかなか踏み出せない部分がありましたが、そういうところも今スムーズに進めるようになってきています。

子供たちの姿を見ている1人1台端末をかなり使いこなしているなと思います。スクラッチというプログラミングでゲーム的なものを作ることを特別支援のお子さんがやっていて、将来そういう仕事に携われればなど、おぼろげにイメージしている子供たちもいます。大事なことはスマホなりタブレットの使い方だけでなく、その情報をどういうふうに取り捨選択していくのか、信頼できるものがどうなのかということ、それからまた発信する側になったときに子供たちがどんなことに留意していかなければいけないか、そういうところを学校特に小学校としては大事に子供たちに学んでいただけるように考えていく必要があるなということを、痛感しています。

○意見交換

②長野県におけるコミュニティスクールの現状と課題について（資料別添）

【松澤委員】

いろいろな人に話を聞きました。コミュニティスクールというのは保護者にとって、コミュニティスクールを活用されてる方もいれば、コミュニティスクールって何？どこにあるの？誰が行くのって？全く知らない保護者もたくさんいます。活動している学校では、毎月1回、地域と保護者で会議をして、どんなふうに進めていくか、運営について話し合う場があるということで、その辺は活発なのかと、PTAとして感じています。先ほどの説明の問題点として高齢化が問題になっていることで、なぜ学校に行ってる子どもたちの親世代が参加しないのかということと考えたとき、コミュニティスクールが学校によって呼び方が違う。小牧応援団という形で、コミュニティスクールっていうことは全く周知されてなくて、小牧の応援団ってお花の水くれたとかいろんなことをしているということですが、入会申込書とかない。今までコロナでその親同士が集まるという機会が全くなく、コロナ前はPTA総会というのがあり、体育館で集まって、いろんな情報を共有していたんですが、現在そういったものが廃止されてたりとかして、情報がやっぱり入ってこないというのが一番の問題だと思います。情報が入ってくる家、入ってこない家いろいろあるので、この時代は、そのデジタルが進むんですけども、それも活用しながら、コミュニティスクールは、ちょっとまだPR不足なのかと思います。実際100%の設置率なのに知らない親御さんが多いので、その辺はこれから考えていった方がいいかと思います。

【長井委員】

私はコミュニティスクールの信州型コミュニティスクールが広まってきて、何校か学校を経験している中でコミュニティスクールというものが徐々に認知されるようになってきました。それから、活動内容についても本当にその学校学校で地域との連携によって特色のあるコミュニティスクールの活動がされるようになってきて、定着してきているということは、年数を重ねるにつれて感じています。それがPTAの保護者の方にどの程度認知されてるかということについては松澤様からご意見いただいたように、確かに十分でない部分があると感じました。実際にコミュニティスクールの中に、PTAの保護者の方がどのぐらい関わっているかって学校によって違う様子があると思います。PTAの方は保護者の方にも広く呼びかけて学習ボランティアに入ってもらっているような学校は結構認知が進んでいるのではないかと、逆にそのPTAの方の

お力をいただくよりは地域の学校にお子さんが通っていないような方の力を借りるような学校についてはそういうところがまだ認知されていない。そんな差もあるのではないかと思います。一番大事なのはコミュニティスクールのコーディネーターをどんな方がやったださるかということが、各校での取り組みの様子と違いに表れてるのかと思いました。地域の方で本当に顔が広い方をお願いしているような、学校ではそういう地域からの取組もいただいています。だんだん学校職員が特に教頭だとそういうところではなくて、地域の方に移行していくということが今進んできたので、だいぶ認知されるようになってきたと思います。教頭先生がやっているような学校ではなかなかそういう部分が、難しいのかな。地域に移行するということが進んできたのでいいかなというふうに思います。学校としては先ほどの話に戻りますが、認知していただくということでは確かに名前が違うという部分もありますが、学習ボランティアとしてやっていることも、もう普通の学習の中の一環で、来ていただいてこんなことやってますよという情報発信を学級だより学年だより等ではしています。そんなところにもコミュニティスクールっていうこともやっぱりアピールしていく必要があるんだなということをお話から感じました。

【柳澤委員】

佐久市の公立小・中学校は21あります。佐久市は信州型コミュニティスクールを行っていて公民館も、全面的に協力するというで進めてきています。公民館は地域と子供を繋げる取り組みとして、学校を順番に回して公民館の体験を子供たちにしてもらい取り組みをしています。様々な活動をとおして子供たちと公民館の学習グループの皆さんが触れ合う活動をしています。また夏には子供公民館という25の講座を設けて、夏の間集中的に子供の講座を開いています。こちら地域先生と触れ合うもの作りやいろいろな体験、また一部、探究的な学習も取り入れて行っています。学校から要望があればすぐに応えるということで公民館職員に周知しているのですが、昨年度今年度の事例としては、学校からクラブ活動の講師を全面的に地域の先生にお願いしたいというお話がありました。公民館では地域の人材を把握しているので、そちらをご紹介したというようなことが複数回ありました。佐久市の課題はやはり先ほどの長井校長先生のお話にありました通り、コーディネーターが大変苦労しているということです。そこで佐久市の社会教育委員の調査活動から始まったことですが、各校のコーディネーター同士の横の連携がなく、学校からいろいろ要請された場合に自分1人だと人材もよく知らないしどうしたらいいかわからないというコーディネーターの方の悩みが非常に聞かれるようになりまして、それで学校教育課と連携しまして、学校の担当者とコーディネーターの方等で年に2回程度なんですけれども、リモートなどの会議をしております。そこでいろいろな学校の悩みやアイデアなどを知ることができて、非常にいいなと思っております。

それにしても私が思うのは、コーディネーターは非常に大変だということです。佐久市は信州型なんですけれども、周辺の町村を見ますと、一部国型の取り入れといますか、教育委員会がコーディネーターを町村で一人任命しているというようなところがずいぶん増えてきております。佐久市は少し大きいものですから、1人ではそれはできないなというふうには思っています。けれども、少なくとも中学校区ぐらいで一つのコミュニティスクールの会議を持つ、のように括ってもいいのではないかと私は感じております。

【森田委員】

私の今の関心事は中学校の部活動がなくなるということです。今、スポーツ運動部はかなり地域移行という形で地域のスポーツクラブやグループでというような形で動いています。文化部も中学校から部活がなくなるということで、今まで中学生で部活に入って、時間を使ってみたり、エネルギーを使ってみたり、友達を作ってみたりという、経験ができたっていう場。ここに、コミュニティスクールをうまくはめ込めたらいいのではないかなと考えたりしました。小学生はかなりコミュニティスクールがうまく動いてるんじゃないかな

いかと思います。6学年もありますので家庭数もまあまああること、子供だとやはり関わりたいという大人が多いと思います。中学生は若干思春期なので、大人がちょっと距離を取ってしまうところを、キャリア教育だったり、ボランティアだったり、そういった形で学校に入れるのはコミュニティスクールなので、それこそ部活ではないんだけど、クラブ活動のように月・水・金とか、あと学校が使えないのだったら、長野県は公民館が一番多い県であるので、そこを特色として、公民館との部活との連携みたいな形で、うまく連携できたら学校もいいこともあると思うし地域も嬉しいこともあるんじゃないかなと思います。ここもコーディネーターとかその地域によるのかなと思っています。私は、その次の期に副会長やって、次の期はPTAの会長をやらせていただくことになるので、部活がなくなる最後を見届けてきちんと次の世代に繋がるような何か仕組みができたらいいと思いました。

【齋藤委員】

私が活動してる泰阜村に関しては、人によるというところが非常に大きいかなと思います。学校長も中にはこのコミュニティスクールの運営委員会の会議があっても参加してこないみたいな方がいらっしたりすると、ちょっとこれどうなのって、信州型と言っているのにというようなことも感じるの、どこかでコミュニティスクールがどういった形になればいいのかという、目指すべき姿を学校長も教育委員会もそうですけれども、共有できるイメージがもう少しあるといいのかと思うところではあります。

泰阜村においては学校と地域の連携は非常に進んでいます。ただ一方でそれがコミュニティスクールなのかということとまた若干違うなというところもあるので、形としては、どちらでも構わないと思うんですが一方で、継続的に続けるとなると、このコミュニティスクールというものがないと進まないものもあるんじゃないかなというところも感じています。

先ほど課題で出た学校・家庭・地域における目標の共有みたいなところは非常に難しいので、私自身もどうやったら共有できるんだらうと、どんな子供を育てるかもそうですけれども、言葉にするのは簡単けれども、ここをやっぱり乗り越えられた市町村の事例がもしあれば、そういったところを共有しながら学び合える場があると、少し進めるのではないかなと感じています。

【向井委員】

私からは学校と地域の連携は何で大事なのかということと、ビジョンの共有という話があったので、こういうふうにかえたらいいんじゃないかということと少し話したいと思います。

まず地域自体が人を育てる機能は元々あったんです。いろんな地域の大人たちが子供のことを見守っていて、いろんなことを教えてくれたり、そうした関係って元々が育つ機能っていうのは地域の中にあたりました。でも、そうした機能を学校の先生にどんどん委ねて、保護者もお任せして、学校の先生がやるのがすごく膨らんで、しかもアカウンタビリティという話です。本来だったら個人を中心に、地域も親御さんも先生も子供の幸せ一緒になって信頼関係を作って育ち合う仲間なのに、それがお互いギスギスした関係もあって、みんないっぱいいっぱいになっているが今の状況であって、もう一度こうした学校と地域の連携を作り直すっていうのは、地域の意味で言えば人が育つ、そうした地域を取り戻そうっていうことでもあるし、それぞれの子供を核とした学校地域、そして保護者の人たちの信頼関係っていう感じ、そうしたものを再構築する営みとして、学校と地域の連携のあり方を考えていく必要があるし、コミュニティスクールというのが、そうしたお互いに子供たちに幸せに育ててほしいなと思いだから作っていくことがすごく大事でなのではないかなと思います。

どういうふうにしてそうしたビジョンを共有していくのかということが難しいという話で考えると、学校と地域の流れる時間ですね、大事にしてるところは、それぞれ違ったりする。例えば学校だったら教育課程

があってやるということがいろいろ決まっている。例えば意思決定後、やり方自身も地域と学校でだいぶ違うと思いますし、物事のやり方だとか時間軸とか、そうしたものの違いというのは、どちらがいい悪いではなくて、結構あたりするんじゃないかなと思うんです。それぞれのコミュニティの違いをわかって、目配せができるということがコーディネーターに求められている。でもそれは、やってみないとわからないということもあたりすると思うんです。学校の先生と実際話して、いろいろやってみると、ああそうなんだとわかることもある。なぜ地域の人たちができないのかということも、地域の事情もしっかり理解してこそできるのではないかなと思うので、大事なのは信頼関係。そしてみんないろんなことを言えるような、そうした関係をベースにしながら、一緒になって共同してやっていく取り組みを蓄積していく中でお互いの信頼関係やビジョンの共有ができていくのではないかなと思います。そうしたコーディネートというのはそれぞれのコミュニティの違いというのを、共有しながら、二つの顔を、同時に持てる状況をお互いに繋ぎ合わせて調整できるような人物がすごく求められていると思いますし、そうした意味で柳澤委員が公民館のことを話してくださいましたけれど、公民館は、結構そういう機能になってきたのではないかなと思います。学校の思いと地域の思いを繋ぎ合わせる役割。しっかり地域の公民館の果たしていく役割が明確になっていくと、すごくいいんじゃないかなと、本来の公民館の再生にも繋がっていくのかなと思います

【長峰委員】

時間の流れが違う分野をどのように繋ぐコーディネートしていくかっていうその人材が本当にどうされてるか、発掘するか育てるかというのは皆さんの共通課題かなと思いながら聞きました。社会協議会のボランティアセンターでも4,5年前までは年に2回3回ぐらいコミュニティスクールということ、テーマの一つとして研修をやっていました。正直言って、この研修があって、久しぶりにコミュニティスクールという言葉聞いたというのが反省しながらの今です。

コロナで本当にいろんなものが変わってしまった部分あると思いますが、専門のボランティアセンターの中でも、コミュニティスクールと一緒にやりながら、コーディネート役として良い事例を作らせてもらってるところもあります。また、冒頭でも話をしましたが、今の子供食堂が本当にこのコロナの前と後ろで100ヶ所強からですね、200ヶ所ぐらい、結構毎日に近い形でやってるところから、月1回とかそういうところまで玉石混交ですけども、そこでもリードしてるボランティアの皆さんっていうのは、かなり地域に根ざして、リーダーシップも増えているからコミュニティ力がある人がそういう活動を通して育てて来てるんじゃないかという印象があります。ぜひ、またそういう連携ができればと思います。

【細萱委員】

例えば長野ろう学校は、佐久の方から来る方、また松本や飯田から通う生徒がいるということで、地域と繋がるというのは非常に簡単ではないということが実感です。防災という視点で、ここに私達の学校があるんだよということを、この近くの長野市の三輪の方たちに知っていただいて、何かあったら助けてくださいということは発信していかなければいけないと思います。本校では寄宿舎で子どもたちが生活しています。地震や火災などあった場合、子どもたちがいて、消防団の方に駆けつけていただくとか、区長さんに知っておいていただいて、何かあったらここに寝泊まりして避難することもあるかもしれないということで、今年は夜間の避難訓練に地域の消防団の方ですとか区長さんですとかに来ていただきました。そうしたら、こんなふうに子どもたちが寝泊まりしているんだねと実感を持って話してくださり、聴覚に障害のあるお子さんたちだから一番先にここに来るよと言ってくださり、子どもたちも非常に心強い思いをしていました。私もこんなに近くに皆さんいらっしゃるけれど、本当に今まで何かあったときに、これは実際どうやって避難すればよかったのかと思いました。これからやっていかなければいけないということで、コミュニティス

クールという形ではないのですか、地域に私達の方からここに私達がいるんだよということを発信して、そして繋がっていただくということを、様々な活動の中で行っていくことが大切だと思います。今回、まず防災のところが非常に大事だったなということを実感しています。

【羽田委員】

県の社会教育委員会活動はそれぞれの市町村が活動の場なわけです。そこでもコミュニティスクールというのは非常に大きなテーマの一つになっています。そういうものを取り入れていこうという活動は増えてきています。私たちの会は、いろいろなところでお互いの活動を支援するための勉強会みたいなことを主にやっています。うまくいっている事例を勉強する機会はあるのですが、実際にうまくいってるところというのはそうたくさんはない。皆さんも当然ご存知のことと思いますが、実際にうまくいってるところというのは、例えばコーディネーターの方が熱意と情熱と時間をかけて一生懸命やってるというようなところが多いのかなというのが私の実感です。そういった部分ではどうしても地域差、個々の違いが出てきてしまうのは仕方ないことかと。まだまだ難しいんだなと。お互いが同じ目標を共有できるかどうか、そこが大きな問題だと思っています。学校の側にはもっとしっかりと共有したい要望があるのかなと思いましたが、松澤さんの話では、保護者の方も割とみんな知らないんだなというのは意外でした。我々も勉強して進めていかないといけないと今日は感じました。

○振り返り

○閉会